

9	尾北	扶桑町立扶桑東小学校	オザキ シオン 氏名 尾崎 史穂
分科会番号	1 2	分科会名	自治的諸活動と生活指導（小学校）

研究題目

一人一人が安心して過ごせる学級づくり

研究要項

1 主題設定の理由

学習指導要領総則では、「児童が安心して学ぶことができる教育環境を整え、一人一人の発達を支えていくこと」が学校教育の重要な役割として示されている。また、学習指導要領解説総則編においても、「児童が互いに認め合い、安心して自己発揮できる学級経営を行うことは、豊かな人間性や主体的に学習に取り組む態度を育成する上で重要である」と示されている。学級は、児童が一日の大半を過ごす生活の場であり、学習や学校生活の基盤となる集団である。そのため、一人一人が安心して自分の思いや考えを表現し、互いの違いを認め合いながら活動できる環境を整えることは、学級経営において欠かすことができないと考える。

4月に「教室で過ごすことに不安を感じたことはありますか」というアンケートを実施した結果、26%の児童が、「不安を感じたことがある」と回答した。このような実態から、本学級においても児童が安心して過ごすことができる学級づくりを基盤とし、互いに認め合う人間関係を育むことが必要であると考えた。

そこで、日々の教育活動の中で一人一人のよさや努力を認め合う機会を意図的に設定するとともに、コミュニケーションタイムを設定することや、言葉の指導を徹底することで、児童一人一人がさまざまなことに安心して挑戦したり、自分らしさを発揮したりできる学級づくりを目指していきたい。そこで、教育実践研究家である菊池省三氏が提唱する『菊池実践』を基に、児童の実態に合わせた研究実践をしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の方法

(1) 研究の仮説

- ① コミュニケーションタイムを設定することができれば、自分の思いや考えを相手に分かりやすく伝えることや、相手の考えや気持ちを受け止める経験をすることができ、話しかけやすい雰囲気が生まれたり、仲間との心理的な距離が縮まるだろう。
- ② 学級の仲間に褒め言葉を伝えたり、学級の仲間に褒め言葉を伝えられたりすることを通して、「プラスのストローク（追い風）」を互いに送れば、自他のよさに目を向けるようになり、自分は学級の大切な一員であるという安心感につながるだろう。
- ③ 児童一人一人の努力や成長、友達への思いやりなどを可視化し、自他のよさや成長を認め合い、自己の成長を実感する経験を積み重ねることができれば、互いを認め合い、言葉を大切に育てる学級の風土を醸成することができるだろう。

(2) 研究の手だて

- ① 仮説1に対する手だて
 - ・ 毎週月曜日の朝10分間のコミュニケーションタイムを設定する。
- ② 仮説2に対する手だて
 - ・ バラスーシカード（学級の仲間のよいところを発見して伝え合う）
 - ・ 褒め言葉のシャワー（主役の児童に対して、学級全員から褒め言葉をシャワーのように連打する学級活動）

- ・ 仲間のよさや個性を認め、尊重し合う活動【白い黒板～七タ～】

③ 仮説3に対する手だて

- ・ 価値語モデル「児童の考え方や行動をプラスの成長へと導く言葉」
- ・ 言葉への意識を高める風土の醸成（言葉を豊かにする活動）

(3) 検証の方法

- ・ 児童に対し、選択式や自由記述式でのアンケートを実施する。
- ・ 児童が綴った「成長ノート」の記述を基に評価する。

3 研究の実際

(1) 毎週月曜日の朝10分間のコミュニケーションタイム

週に一度、児童同士が互いに対話する「コミュニケーションタイム」を設定した（資料1）。この時間では、互いの考えや気持ちを伝え合い、相手の話を否定することなく、最後まで聴くことを大切にするように声かけをした。コミュニケーションを継続的に行うことで、児童は友達の考え方や価値観、興味、関心を知り、相手への理解を深めることができた。

要約ペアトーク	教師がテーマを決める。 Aさんは質問する人、Bさんは質問に答える人とする。 Aさんは制限時間20秒～30秒で、Bさんに質問をし続ける。その際、Aさんには、相手をどんどん深掘りできるような質問の仕方（言葉のキャッチボール）を意識し、反応（相づちやうなずき）にも気を配ることを指示する。 制限時間が来たら、Aさんは「つまりBさんは～ですね」と要約したことをBさんに向けて話す。 ここでは、相手に話をきちんと聞いているよという安心感をもたせることや、自分と仲間との考え方の違いに気付き、互いに認め合う空気づくりを大切にする。
---------	--

【資料1 コミュニケーションタイムの活動例】

また、自分の思いや考えを安心して表現する経験を積み重ねることで、「話しても受け入れてもらえる」という安心感につながるように心がけた。コミュニケーションタイムの活動時間以外にも、男女関係なくコミュニケーションを楽しむ様子が見られた（資料2）。このコミュニケーションタイムの振り返りには、「4月ではあまり話せていなかった人とも、少しは喋れるようになったし、放課とかにみんなでゲームをして、1人になっている子が少なくなった」という記述があった（資料3）。



【資料2 男女関係なくコミュニケーションを楽しむ様子】

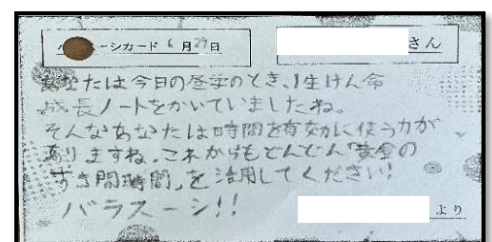
- ・ 4月ではあまり話せていなかった人とも、少しは喋れるようになったし、放課とかにみんなでゲームをして、1人になっている子が少なくなった。
- ・ 昔よりもほめる系の言葉が多くなり、たくさんの友達と仲良く過ごして不安が少し減った。
- ・ 男女の壁が壊れ、一緒に交流することが増えたおかげで仲がもっと良くなったと思います。例えば放課に男女関係なく普段あまり話さない人ともどすこいゲームや指スマなどをよくやるようになりました。絆が深まった証拠だと思う。
- ・ あまり話したことがない子にも自分から話しかけに行くことができるようになったと思う。

【資料3 コミュニケーションタイムの振り返りの一部】

(2) 学級の仲間に褒め言葉を伝えたり、学級の仲間に褒め言葉を伝えられたりする活動

① バラスーシカードの取組

「バラスーシカード」とは、学級の仲間が一日の学校生活の中で、「以前よりも成長している姿」「成長し続けるために努力している姿」「学級・学校のために活躍している姿」などの仲間の素晴らしい行動に目を向け、褒め言葉を書いたカードのことである（資料4）。バラスーシカードを取り組むための原則として、仲間への褒め言葉は、「事実の一文＋意見の一文」とし、「〇〇さんは、今日の〇時



【資料4 児童が実際に書いたバラスーシカード】

間目の時に、～でしたね。そんな〇〇さんは、～人ですね。バラスーシ！」という型を設け、その型に沿って取り組んだ。一日の学校生活の中で仲間への褒め言葉を、隙間時間を見つけてカードに書き、帰りの会の終了後に、ペアの仲間のところに行き、互いが読み合っけてプレゼントした（資料５・６）バラスーシカードのペアは、隣の席のペアの仲間へ書くことを指定したり、同じ学習グループの縦ペア、斜めペア、時には同じ誕生日同士で書くなど、男女関係なく、さまざまなパターンで取り組んだ。バラスーシカードを送り合う活動の中で、「自分もうれしい・相手もうれしい・みんなもうれしい」を合言葉とし、ただ褒め言葉を送り合うだけでなく、相手軸で考えることを伝え、仲間がもらってうれしいイラストをバラスーシカードの裏面に書いたり、価値語を入れて書いたりするなどのアレンジを加え、一人一人の個性が溢れるバラスーシカード作りに取り組んだ。

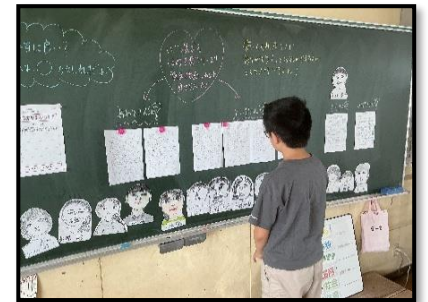


【資料５ バラスーシカードを読み合う様子】



【資料６ バラスーシカードを送り合う様子】

年度当初は、学級の仲間のよいところを書いたノートのコピーを黒板に掲示し、「褒め言葉の型」を学級全体に周知させ、朝から児童が気持ちよくスタートできるようにした（資料７）。このバラスーシカードを送り合う活動の振り返りには、「友達のよいところを早く見つけられるようになったり、友達が思ってくれたことを知れたりしてうれしいし、クラスもよい空気になった」という記述があった（資料８）。



【資料７ 褒め言葉の黒板を見る様子】

- ・自分がクラスで必要とされている存在だと気づくことができ、安心できた。
- ・もらったりしてクラスのみんなからこんなにいいところを見つけてくれていたんだと思ってクラスのみんなに認めてもらえた気がした。
- ・友達の良いところを早く見つけられるようになったり、友達が思ってくれた事を知れたりして嬉しいし、クラスも良い空気になった。
- ・みんなへの感謝の気持ちがさらに大きくなったと思う。
- ・バラスーシカードを書いていると、その人に対して『すごいね』などの尊敬の気持ちや、『ありがとう』と感謝の気持ちなどがどんどん大きくなった。全員からもらったバラスーシカードを読み返した時、とても温かい気持ちになった。多分、みんなもそうだと思う。

【資料８ バラスーシカードの振り返りの一部】

② 褒め言葉のシャワーの取組

「褒め言葉のシャワー」とは、一人一人のよいところを見つけて、学級全員が褒め合う活動である。その日の「主役」の児童が帰りの会で学級全員からの褒め言葉のシャワーを浴びる。褒め言葉は、（事実の一文＋意見の一文）を原則とし、１５秒～２０秒程度で、次々に発表していく（資料９）。全員が「褒め言葉のシャワー」を言い終わったら、シャワーを浴びた「主役」の児童が感想のスピーチとしてお礼を述べ、全員の拍手で締めくくる。「褒め言葉のシャワー」をしていく中で、学級の中でいくつかルールを設けた。①話し手の方に体を向けること（正対）②惜しみない拍手をすること③発表者の話を遮らないこと④共感や納得したときには、相づちや、うなずきをすることである。このような話し手が話しやすい温かい雰囲気作りを積み重ねることが、児童一人一人の安心感に結び付くと考えた。この「褒め言葉のシャワー」の振り返りには、「自信をもつ人が増えてきて、仲が深まったと思う。不安ではなく安心感がアップしたという変化を感じる」という記述があった（資料１０）。



【資料９ 褒め言葉のシャワーの様子】

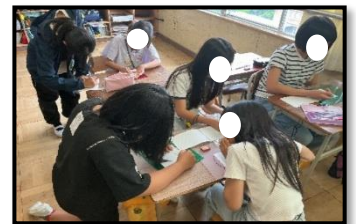
- ・自信をもつ人が増えてきて、仲が深まったと思う。不安ではなく安心感がアップしたという変化を感じる。
- ・一人一人のいいところに目を向けられるようになった。そのため、相手を見た目で判断せず、誰に対しても平等に接することができる温かいクラスになってきたと思う。
- ・ほめ言葉のシャワーを通して、みんなと一緒に伝え合う力がより高まったと思う。ほめ言葉のシャワーがあると、相手は褒めてもらえてとても嬉しい気持ちになるし、褒める側は、相手のすごいところを沢山見つけられて、観察力が高まったと思ったから、伝え合う気持ち・喜び合う気持ちがとても増えたと思う。

【資料 10 褒め言葉のシャワーの振り返りの一部】

③ 仲間のよさや個性を認め、尊重し合う活動【白い黒板～七夕～】

「白い黒板」とは、児童自身が黒板いっぱいに意見や考えを書き込み、最終的に黒板をチョークで白く埋め尽くす活動である。普段の学校生活の中では、当たり前と思っていた行動でも、他の仲間からすると、当たり前ではないこともたくさん存在すると考える。また、高学年という思春期の発達段階を迎える児童に、男女という壁を壊すきっかけとして、七夕という行事に肖り、男子から女子、女子から男子への褒め言葉を送り合った。

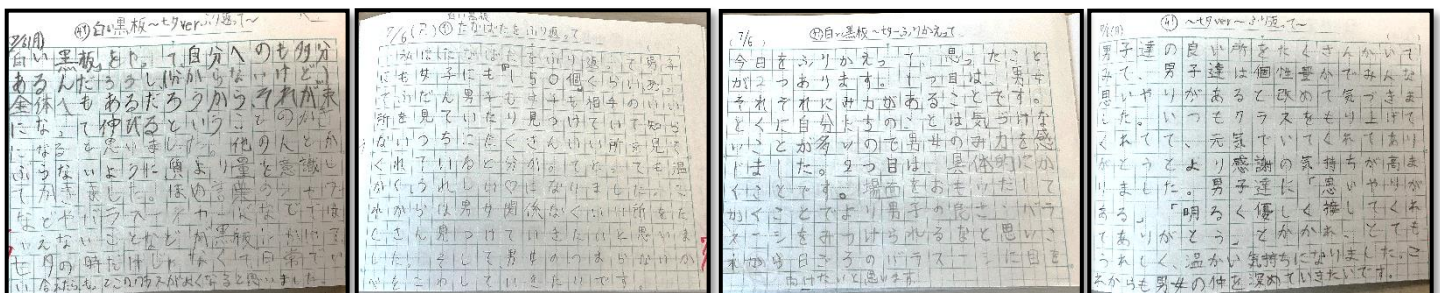
まずは、自分の成長ノートに、異性の「輝いている姿」「努力している姿」「頑張っている姿」「感謝の気持ち」を中心に書き出すところから始めた。そして、複数個書き出すことができた児童から、教師が点検し、書いている内容がかぶらないように黒板に書き出した。授業時間が進むにつれて、褒め言葉の内容が少しずつ出づらくなってくる。そこで、自分だけの力ではなく、仲間の力も借りつつ、日常の様子と非日常の様子（行事などの特別活動）を結び付け、さまざまな視点で仲間のよさに目を向けるように指示を促した（資料 11）。その結果、実際の白い黒板～七夕～で、男子から女子への褒め言葉 87 個、女子から男子への褒め言葉は 116 個集めることができた（資料 12）。この「白い黒板～七夕～」の振り返りには、「男女それぞれに魅力があることに気付いた」「これからも男女関係なくよいところをたくさん見つけていきたい」という記述があった（資料 13）。



【資料 11 褒め言葉を集める様子】



【資料 12 白い黒板～七夕～板書】



【資料 13 白い黒板～七夕～振り返りの一部】

（3）児童一人一人の努力や成長を可視化し、自己の成長を実感する取組

① 児童の考えや行動をプラスの成長に導く「価値語」の指導

「価値語」とは、児童の考え方や行動をプラスの成長に導く言葉である。日々の学校生活の中で、児童の具体的なよい姿や望ましい姿を価値付け、意味付けをもたせるために、写真とセットにし、掲示した（資料 14）。

ここでは、「全員の心に落とし込みたい重要な行為」「非言語のよさや、友達関係の美しさ」「学習や係活動などにおける望ましい姿」の 3 つのタイプを意識し、掲示物を作成した。児童の行動の様子から何を価値付けて、掲示するかを考え、一瞬一瞬を見逃さないように心がけた。掲示する前は、背面



【資料 14 教室の一部の価値語の掲示物の写真】

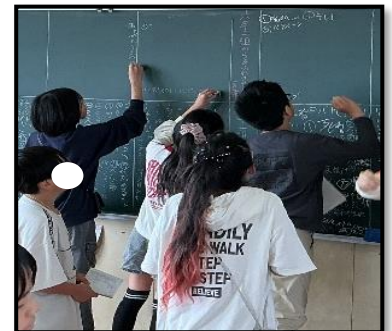
黒板を活用し、価値語を書かずに写真のみを掲示した。朝の会などで、この写真のよさは、どこなのかを考え、学級全体で価値語を創り上げるようにした。翌日には、写真に写っている児童に価値語を書かせ、教室内に掲示した。4月からスタートし、69日で103枚の価値語を掲示し、教室内に価値語を溢れさせた。この「価値語」の活動の振り返りには、「友達はどういう行動をとっているんだと知れたり、自分はこのクラスに認められてるんだと安心できるもの」という記述があった（資料15）。

- ・価値語があると「ここ見てもらえてたんだ」とか、〇〇（ちゃん、くん）すご！！と相手のいいところも見つけられるし、自分が褒められて嬉しい気持ちになれるからいい物だと思う。
- ・友達はこういう行動をとっているんだと知れたり、自分はこのクラスに認められてるんだと安心できるもの。
- ・ぼくは価値のある紙だと思う。なぜならこの行動はいい行動なんだと改めて分かって、これからこの価値のある紙を見てこの行動は価値のある行動なんだと思い出して、続けていくことができるから。

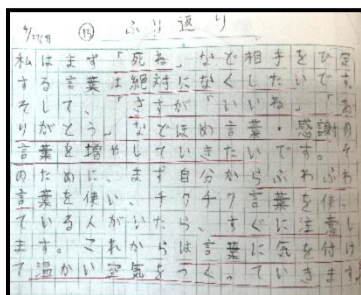
【資料15 価値語に関する振り返りの一部】

② 言葉への意識を高める風土の醸成（言葉を豊かにする活動）

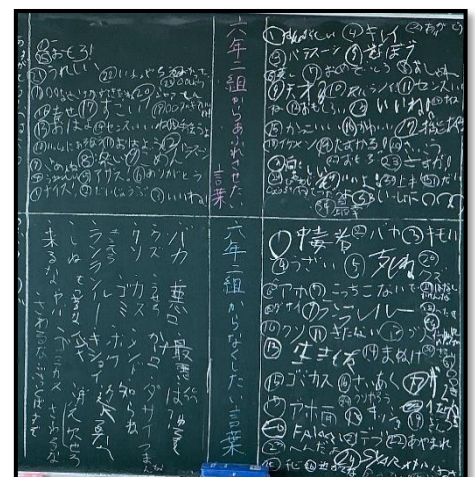
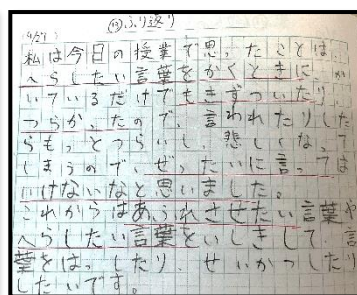
「教室に溢れさせたい言葉」「教室からなくしたい言葉」についての授業を行った（資料16・17）。安心して過ごせる学級づくりにおいて、「言葉」を大切にすることは、不可欠である。言葉は自分の思いや考えを伝える手段であると同時に、相手との信頼関係を築き、学級の雰囲気形成する力をもつ。そこで、一年間学級で「教室に溢れさせたい言葉」「教室からなくしたい言葉」について考えさせ、いつでも振り返ることができるように、掲示物を作成した。この授業の振り返りには、「言葉に気を付けて温かい空気を作っていきたい」「へらしたい言葉を書いているだけで傷ついたり、つらかったのでぜったいに言っていけないと思いました」という記述があった（資料18）。



【資料16 授業の様子】



【資料18 授業の振り返りの一部】

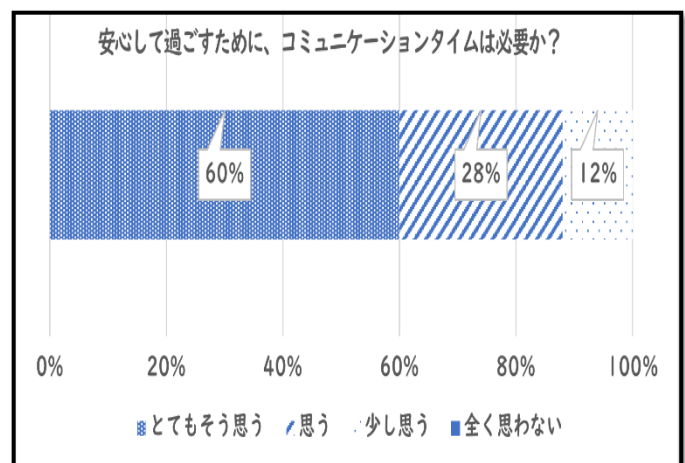


【資料17 授業の黒板の一部の写真】

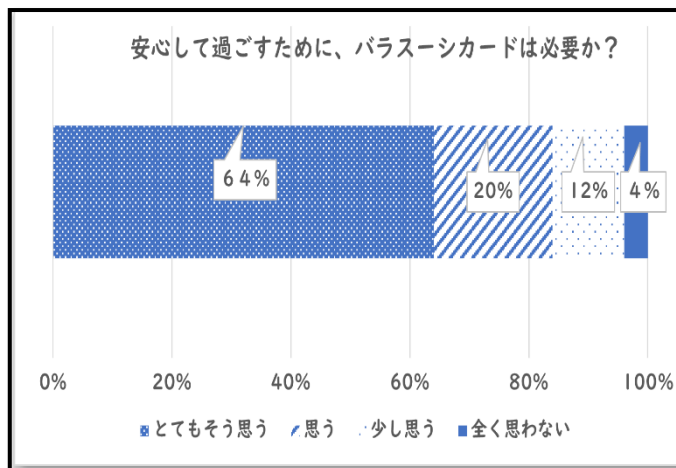
4 研究の成果と今後の課題

(1) アンケート結果

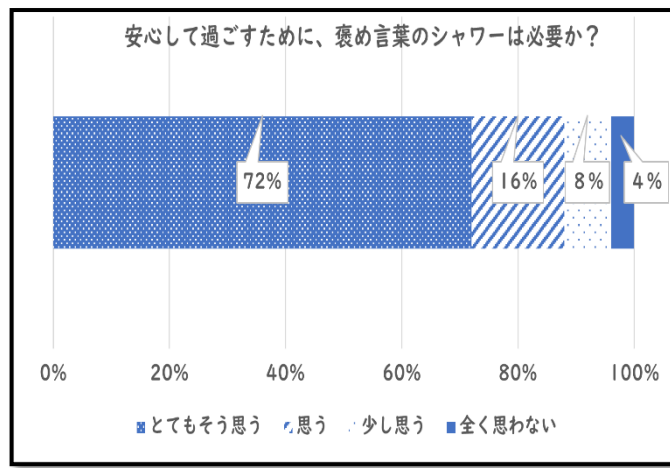
アンケートにて、仮説1・2・3に対するそれぞれの手だてが、一人一人が安心して過ごせる学級づくりにつながっているかどうか質問した結果、【資料19・20・21・22・23】の通りであった。コミュニケーションタイムや価値語、言葉の使い方に関しては、「全く思わない」と回答した児童は0名であり、安心して過ごせる学級づくりにおいて有効的な手段であったと言える。しかし、バラスーシカードや、褒め言葉のシャワーでは、「全く思わない」と回答した児童もいた。



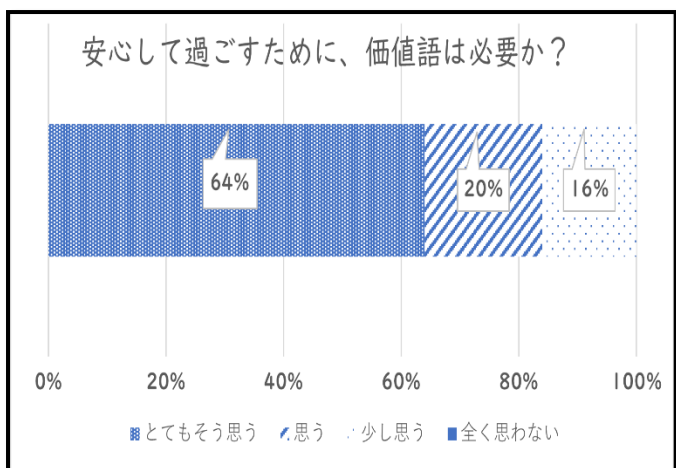
【資料19 コミュニケーションタイムについてのアンケートの結果】



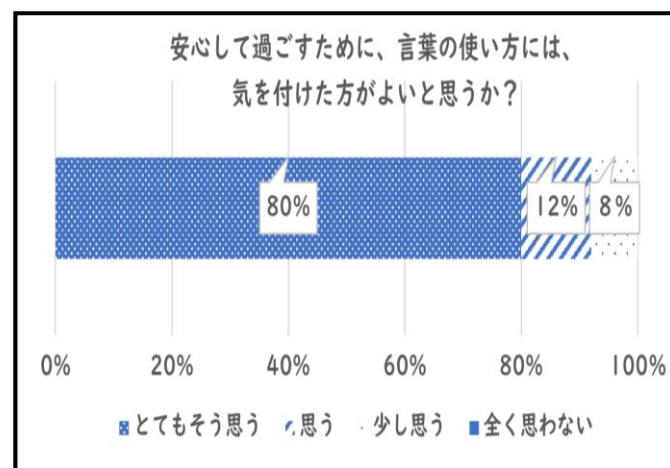
【資料 2 0 バラスーシカードについてのアンケートの結果】



【資料 2 1 褒め言葉のシャワーについてのアンケートの結果】



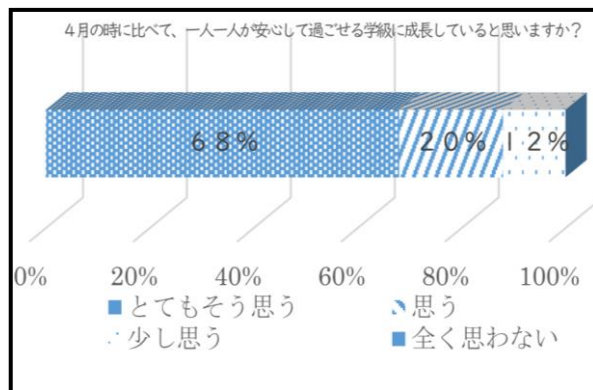
【資料 2 2 価値語についてのアンケートの結果】



【資料 2 3 言葉の使い方についてのアンケートの結果】

(2) 研究全体を通して

「4月の時に比べて、一人一人が安心して過ごせる学級に成長していると思いますか？」という質問において、学級全体として、4月のときよりも一人一人が安心して過ごせる学級に成長してきたと言える(資料 24)。4月から続けてきた、コミュニケーションをとる活動や仲間のよいところに目を向ける活動、言葉の使い方に関する授業が、教室で過ごすことへの安心感につながり、大きな成果を得ることができた。



【資料24 安心感についてのアンケートの結果】

(3) 今後の課題

「バラスーシカード」や「褒め言葉のシャワー」では、「書くことが面倒である」という意見があった。毎日実施することで、「心が温かくなった」「周りから認められたように感じた」という意見があり、教室で過ごすことの安心感につながると考えられるが、負担に感じる児童も存在することが分かった。そのため、ただ闇雲に行うのではなく、なぜ「褒め言葉」を送り合うかを考えさせ、目的を明確にしていかなければならないと感じた。また、「教室が安心して過ごせる場所だと思いますか？ それはなぜですか？」という質問に対して、「安心して過ごせるなと思うときと思えないときがある。たまに無視されるときがあり、自分は学級の皆から慕われているのかなと心配になることがある」という回答があった。このことから、学級全体の安心感は向上した一方で、児童一人一人の安心感には個人差があることが明らかになった。特に、人間関係に不安を抱える児童に対しては、日頃の観察や教育相談を通して思いや実態を把握するとともに、互いを認め合い、誰もが安心して過ごせる学級づくりを継続していく必要がある。